

第9章 事業に係る環境影響の総合的な評価

9.1 継続して講じる必要のある環境保全措置の項目及びその理由並びに継続して行う必要のある事後調査の項目及びその理由

本項目に係る平成 28 年度の事後調査計画(案)を表 9.1-1 に、事業実施区域及びその周辺位置図を図 9.1-1～図 9.1-6 に示した。

平成 29 年 9 月には全ての工事が完了していることから、平成 29 年度は存在・供用時の事後調査を実施しており、平成 30 年度についても引き続き存在・供用時の事後調査を実施する。

表 9.1-1 事後調査項目及びその内容(1/2)

調査項目		調査回数・期間	調査地点	調査手法
騒音	ヘリコプター騒音	・通年	高江集落の1地点	自動測定機器による観測 テイルローラー機の騒音も計測に含まれる。
り 赤土等による水の濁	下流河川でのSS濃度、濁度及び流量	・平常時:4季 ・降雨時:2回程度	・Gの1地点(図9.1-2参照) ・Hの1地点(図9.1-3参照) ・N-1(a)、(b)の3地点(図9.1-4参照)	採水した試料を定められた方法に準じて分析を行う。また、降雨時は自動採水器による採水を行い、試験室内で分析を行う。
	河川の赤土等の堆積状況	・1回	・Gの1地点(図9.1-2参照)	河川底質中懸濁物質含有量簡易測定法により分析。
植物	貴重な植物種の移植後の生育状況	・年4回	・N-4地区を除く貴重な植物の移植場所	移植株について生育状況を確認し記録する。
	林内の温湿度	・連続観測	・G ・H ・N-1(a)、N-1(b)	自動測定機器による測定。
	影響範囲50m内における貴重な植物種及び植生の生育・分布状況	・4季	・G、H、N-1(a)、N-1(b)の無障害物帯縁辺から50mの範囲 ・植生断面図は東西、南北方向	調査範囲内における貴重な植物種及び植生の生育・分布状況の把握。また、植生断面図の作成。
	早期緑化帯における植栽種の生育・形成状況	・4季	・G、H、N-1(a)、N-1(b)、G進入路の早期緑化帯	早期緑化帯(マント群落・ソデ群落、無障害物帯)の地点に調査方形枠を設置し、植物種の生育・分布状況等を記録。
	工事による副次的影響を復元した場所における植生状況	・4季(植栽後に実施)	・工事による副次的な影響場所(H付近の作業ヤード等。図9.1-2～5参照)	工事による副次的な影響が生じた場所において、植生の回復状況について、樹種等の現場記録及び写真撮影。
動物	周辺林内の乾燥化による貴重な動物種の生息状況	・4季	・G、H、N-1地区の事業実施区域を含む半径約500mの範囲(図9.1.2～4参照)	貴重な動物種(哺乳類、爬虫類、両生類、昆虫類、鳥類、クモ類、陸産貝類)の生息状況調査。 目視、鳴き声、捕獲、フィールドサイン法等による状況の把握。
	訓練車両の走行に伴うロードキルの状況	・4季	・G、H、N-1地区等(図9.1-2～4参照)	目視により路上における貴重な動物種の出現状況及びロードキルの状況を把握。
	ノネコ、マンガースの生息状況	・4季	捕獲トラップ ・G、H、N-1地区内 自動撮影装置 ・各地区2ヶ所程度	捕獲トラップの設置及び自動撮影装置による記録。 (設置場所は調査結果を基に適宜検討)
	ヘリコプター飛行時の騒音及び貴重な鳥類、カエル類の繁殖状況	・繁殖時期	・G、H、N-1地区のヘリコプター一着陸帯の直近の繁殖地	事業実施区域周辺の貴重な鳥類やカエル類の繁殖状況を記録する。また、ヘリコプター騒音については、騒音レベルをJIS Z 8731に基づき測定。騒音測定は精密騒音計を用いて測定する。

表 9.1-1 事後調査項目及びその内容(2/2)

	調査項目	調査期間・回数	調査地点	調査手法
生態系	ノグチゲラの人工営巣木の利用状況	・繁殖期(3-6月)	・G、H、N-1地区の人工営巣木の設置場所	設置後に目視及び双眼鏡による確認
	ノグチゲラの人工採餌木の利用状況	・4季	・G、H、N-1地区の人工採餌木の設置場所	目視により、採餌跡等の利用状況の確認
	コウモリ類の巣箱(バットボックス)の利用状況	・4季	・G、N-1地区の巣箱(バットボックス)の設置箇所	設置後に目視及び双眼鏡による確認
	生態系注目種の生息・繁殖状況	・4季	・G、H、N-1地区の事業実施区域を含む半径約500mの範囲(図9.1-2~4参照)	<ul style="list-style-type: none"> ・ノグチゲラ ライン踏査を行い、確認場所や行動様式、営巣場所を記録。 ・ヤンバルクイナ コールバック調査及び踏査中に確認した繁殖行動の記録。 ・ホントウアカヒゲ ライン踏査を行い、確認場所や行動様式、営巣場所を記録。 ・リュウキュウヤマガメ ライン踏査を行い、確認場所や行動様式を記録。 ・ヤンバルテナゴコガネ 樹洞を探索し、生息状況を記録。 ・イシカワガエル等の山地性カエル類4種 繁殖期に沢を日中及び夜間に踏査し、生息や繁殖状況、繁殖場の位置を記録。 ・オキナワミナミヤンマ 成虫は、踏査により確認地点を記録、幼虫はタモ網による確認。 ・アオバラヨシノボリ、キバラヨシノボリ 調査範囲内の河川において、確認位置や繁殖状況を記録。なお、アオバラヨシノボリについては、成魚(雄・雌)、未成魚、浮遊仔魚の別に記録を行う。 ・ヤンバルホオヒゲコウモリ、リュウキュウテングコウモリ 生息が予測される場所において夜間踏査を行い、バットディテクターによる確認。 ・オキナワトゲネズミ ライン踏査を行い、目撃確認や生息跡(食跡、足跡等)を記録。 ・リュウキュウイノシシ、ハブ、ヒメハブ ライン踏査を行い、目撃確認や生息跡(食跡、足跡等)を記録。 ・マングース、ノネコ ライン踏査を行い、目撃確認や生息跡(食跡、足跡等)を記録。
景観	囲繞景観	・4季	・G、H、N-1地区	工事前後において景観区分の比較を行う。また、現地状況写真を用いて、工事前後において比較を行う。

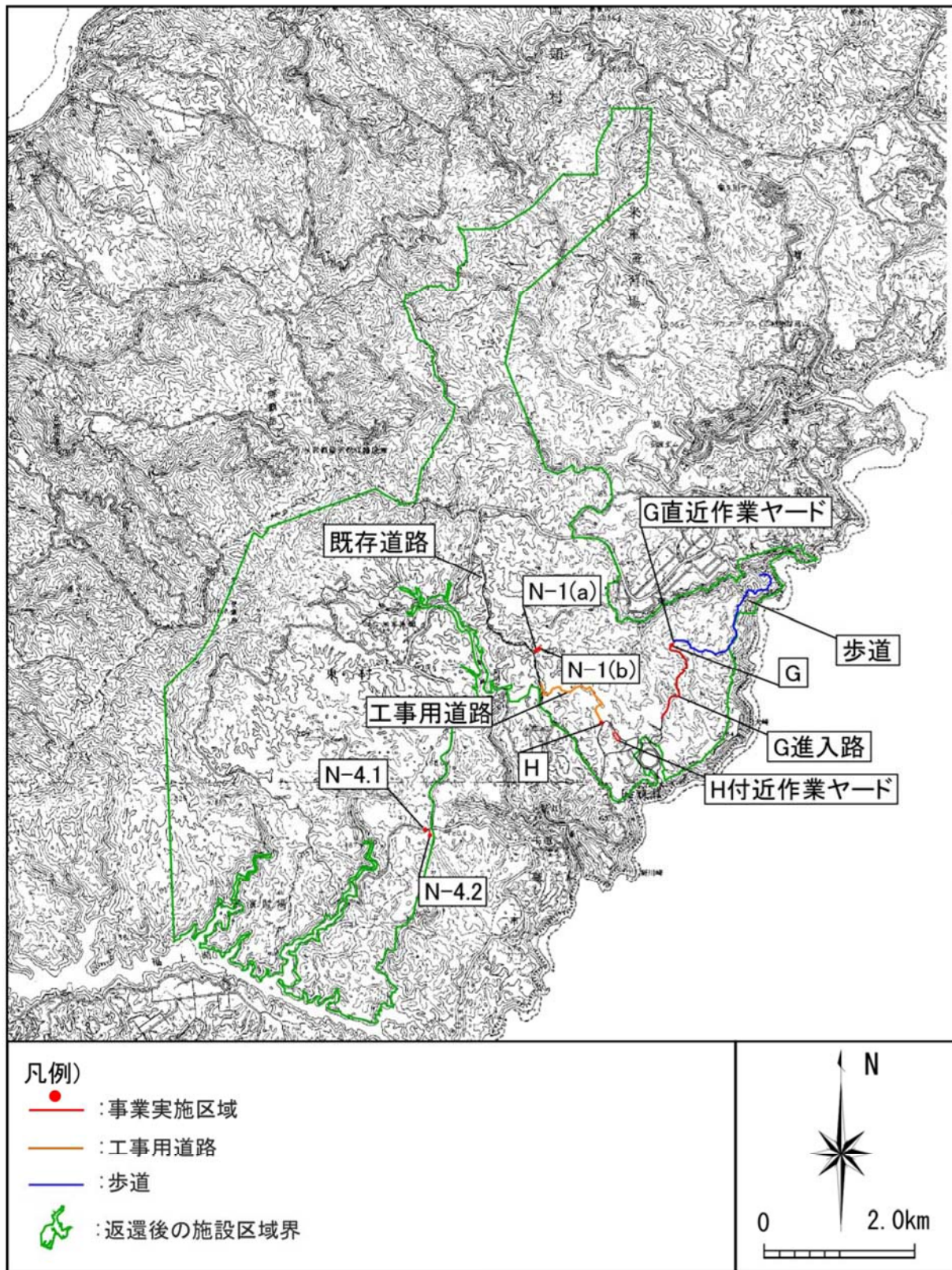
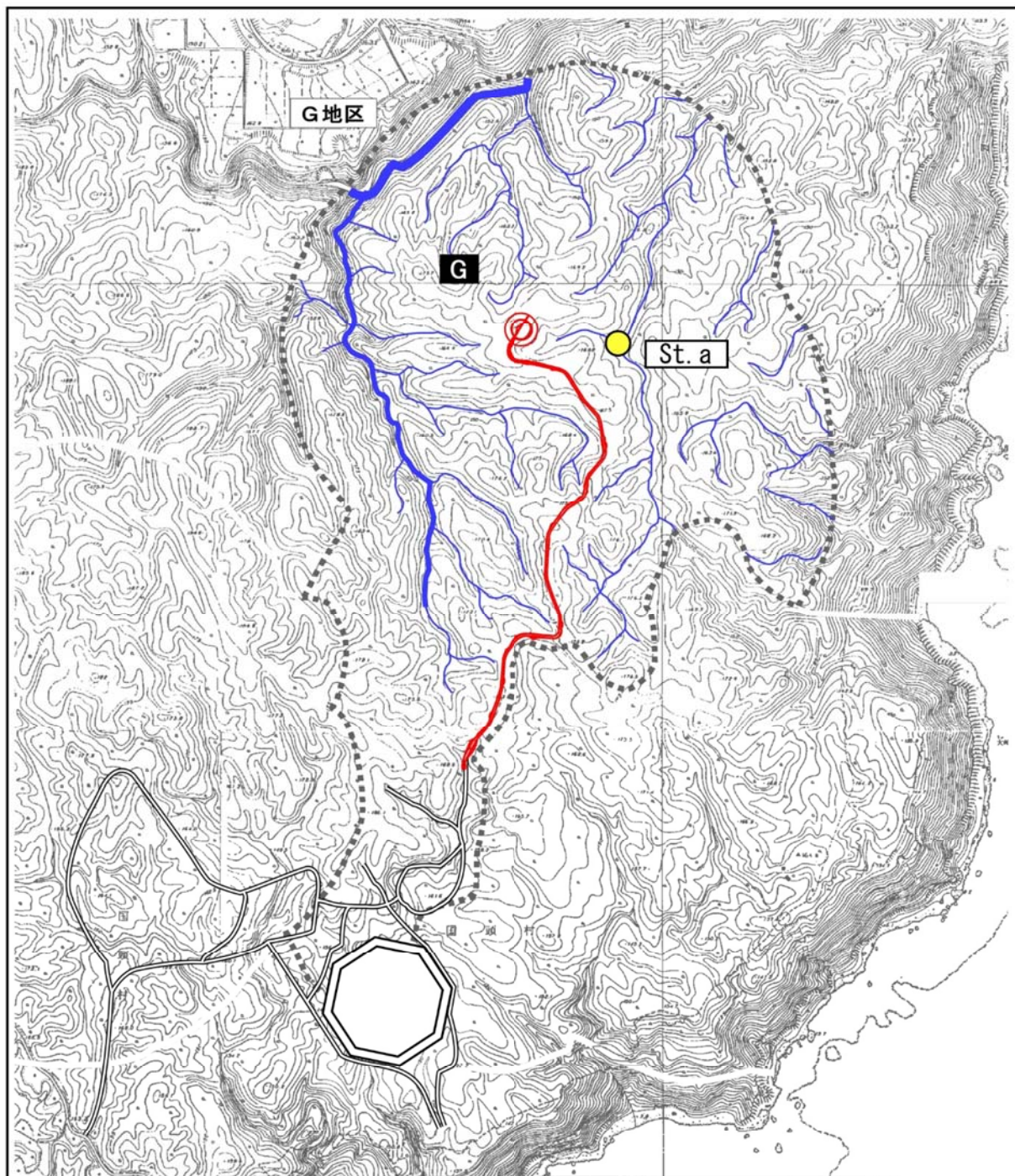


図 9.1-1 事業実施区域及びその周辺位置図(4地区計6ヶ所)



凡例)



: 調査範囲
(存在・供用時の
動物、生態系の調査範囲)



: 事業実施区域

— : 河川

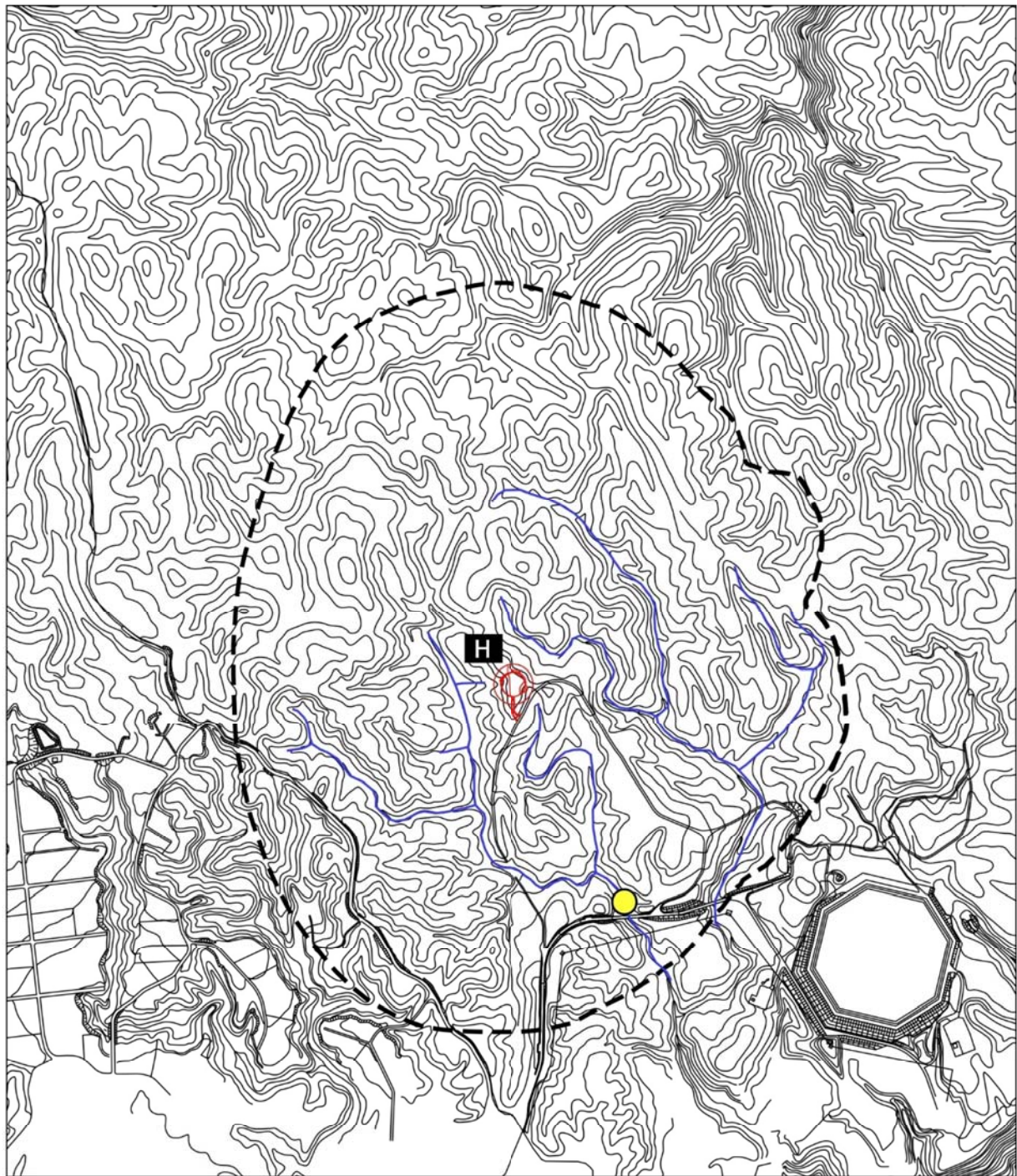


: 調査地点(赤土等による水の濁り)



0 200 400m

図 9.1-2 G 地区における存在・供用時の調査範囲



凡例)



: 調査範囲
(存在・供用時の
動物、生態系の調査範囲)



: 事業実施区域



: 河川



: 調査地点(赤土等による水の濁り)

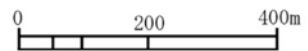
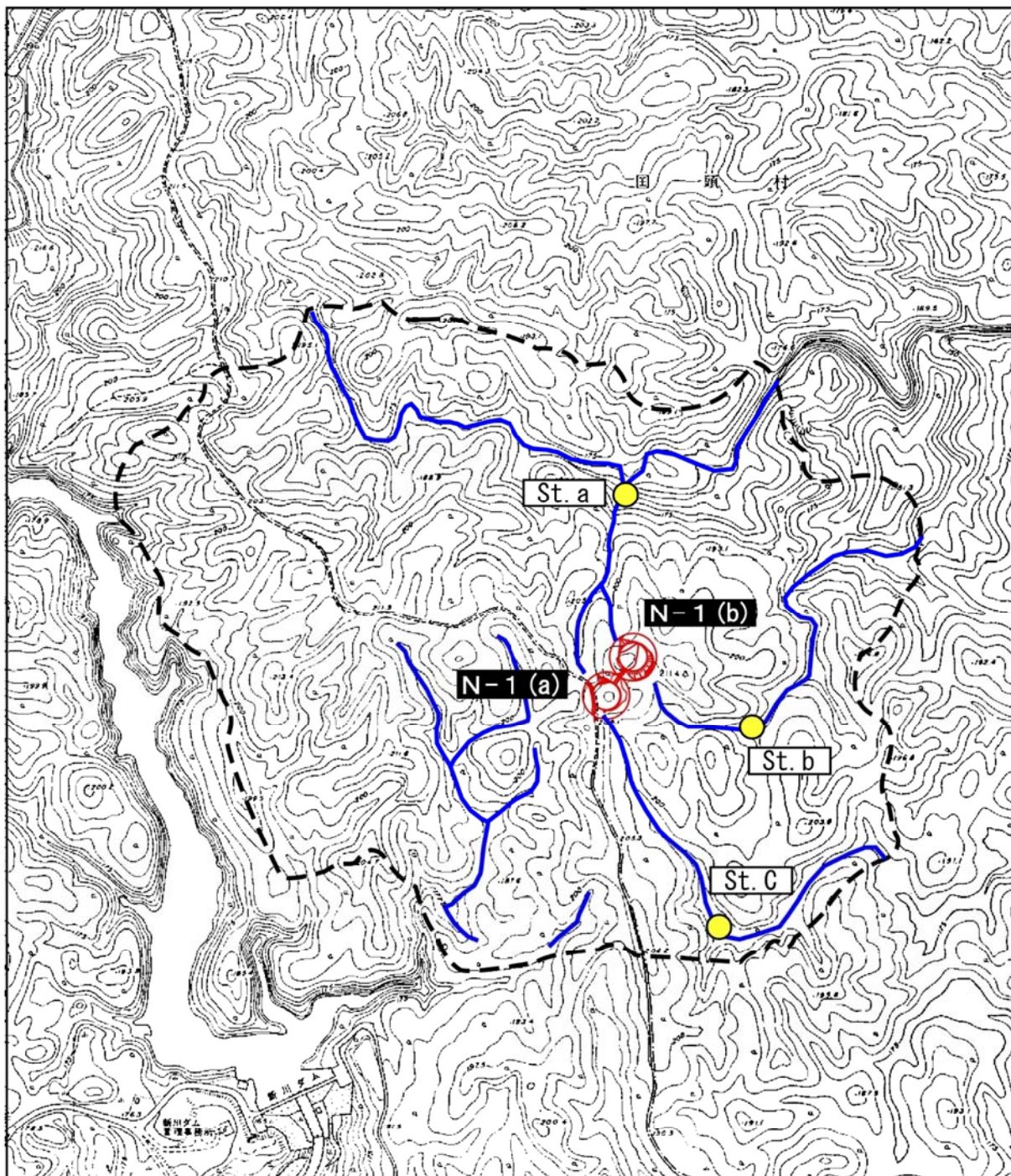


図 9.1-3 H 地区における存在・供用時の調査範囲



凡例)

⋯ : 調査範囲
(存在・供用時の
動物、生態系の調査範囲)

⊗ : 事業実施区域

— : 流下経路調査範囲(動植物)

● : 調査地点(赤土等による水の濁り)



0 200 400m

図 9.1-4 N-1 地区における工事中及び存在・供用時の調査範囲

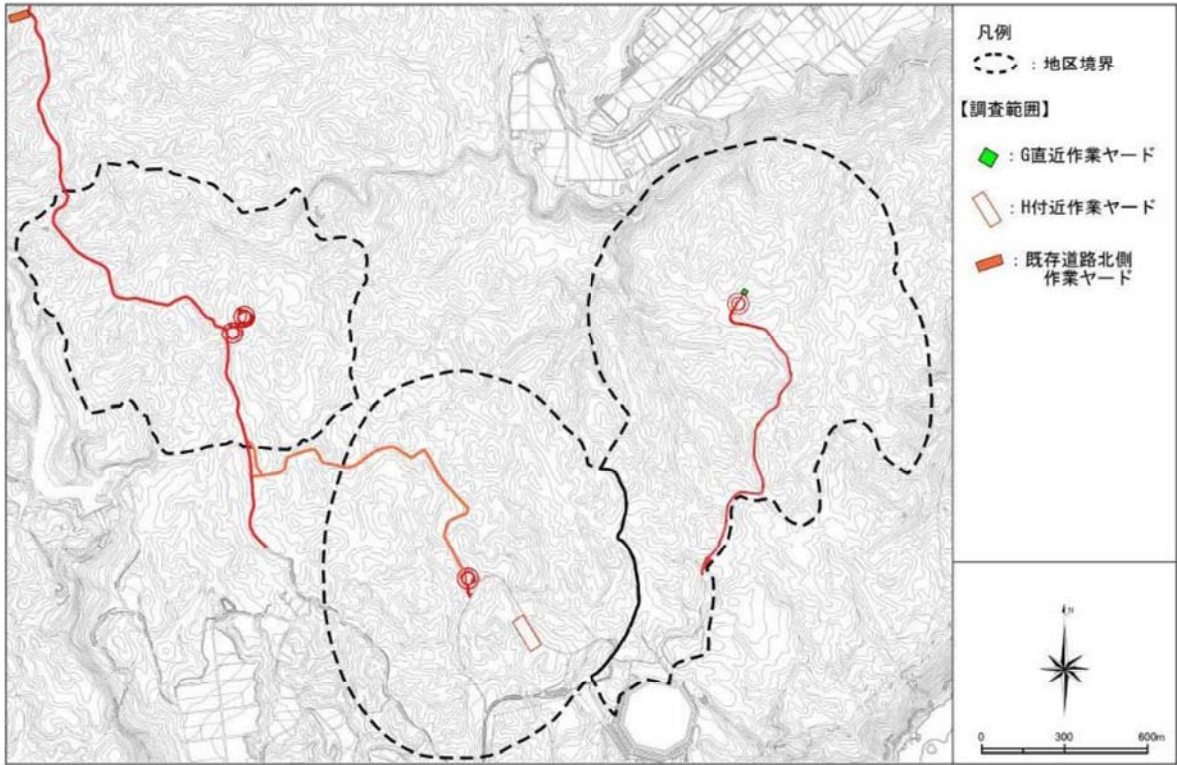


図 9.1-5 工事による副次的影響の復元箇所調査地点(作業ヤード)

9.2 環境保全措置は継続して講じる必要はあるが事後調査は継続して行う必要のない場合の、継続して講じる環境保全措置の項目及びその理由並びに継続して行う必要がない事後調査の項目及びその理由

G、H、N-1 地区については存在・供用時の調査項目に移行しており、引き続き事後調査の中で環境影響を把握していくこととしている。

ただし、アメリカハマグルマ等の外来種の駆除等については、環境保全措置として継続して実施する。

9.3 継続して環境保全措置を講じる必要はないが事後調査は継続して行う必要のある場合の、継続して講じる必要のない環境保全措置の項目及びその理由並びに継続して行う必要のある事後調査の項目及びその理由

当該項目に係る平成 30 年度の事後調査計画(案)を表 9.3-1 に示した。

赤土等の水の濁りについては平成 27 年 2 月より、自動濁度計による観測を行い、降雨時の濁りのピークを把握しているが、平成 30 年度についても引き続き 4 地区の調査地点において同様の確認を行う。

また、歩道、工事用道路等に移植した貴重な植物については、各地区に移植した植物と同様に、平成 30 年度も生育状況を把握する。

表 9.3-1 事後調査項目及びその内容

調査項目		調査回数	調査地点	調査手法
水の濁り	赤土等の濁度計による濁度の連続観測	・連続(降雨時)	・G、H、N-1地区の計5か所(下流河川でのSS濃度、濁度の地点と同様)	・自動濁度計を設置し、濁度の観測を行い、降雨時の濁りのピーク結果から、SS濃度のピークを換算する。
植物	貴重な植物種の移植後の生育状況	・4回	・歩道、工事用道路、既存道路の補修、整備に伴い移植を行った貴重種の移植先	移植株について生育状況を確認し記録する。

9.4 継続して講じる必要のない環境保全措置の項目及びその理由並びに継続して行う必要のない事後調査の項目及びその理由

平成 29 年度に実施していた G 進入路の工事が終了したことにより、工事の実施に伴う環境保全措置については終了、及び工事中の事後調査については終了もしくは存在・供用時の事後調査として継続する。

終了する環境保全措置は表 9.4-1 に示すとおり、「マングースの捕獲調査」、「復旧後の監視」である。マングースの捕獲調査については、環境保全措置であるマングースフェンスの設置の代替として実施したが、マングースの捕獲は無かったほか、平成 23～24 年度に塩屋、福地ダム(SF ライン)間に設置された北上防止柵や環境省、沖縄県が実施している SF ライン以北のマングースの駆除事業の効果が出ており、当該地域での生息密度は低いと考えられる。このことより、G、H、N-1 地区におけるマングースフェンスの設置に替わる環境保全措置として実施したマングース捕獲調査は終了するが、存在・供用時の調査項目である注目種の生息・繁殖状況におけるマングース、ノネコの捕獲や自動撮影機での確認については引き続き実施する。

N-4.1 復旧後の監視についても復旧後は植生が回復しており、近年では植生の生長以外の環境変化が認められず、周辺植生と同程度に生育していることから、復旧が成功したと考えられ終了とする。

終了する事後調査は表 9.4-2 に示すとおり、「工事用車両の走行に伴うロードキル」、「貴重な動物種の移動後の生息状況」及び「N-4 地区における存在・供用時の事後調査」である。

工事用車両の走行に伴うロードキルは、工事終了に伴って工事用車両の走行が無くなることから終了とし、存在・供用時には訓練車両の走行に伴うロードキルとして継続調査が行われる。

また、歩道、工事用道路、既存道路の補修、整備に伴い移動、移植を行った貴重な動物については、寿命等を考慮して1年間の事後調査を行うこととしており、1年間4季の調査終了に伴い、終了とする。

平成 29 年度に実施した N-4 地区の存在・供用時の調査については、供用開始後3年が経過しており、調査結果からも着陸帯の存在・供用に伴う著しい環境の悪化が認められず周辺環境が定常状態にあると判断したことから終了とする。各調査項目における判断理由としては以下に述べる。

赤土等の水の濁りは平常時については評価図書時や工事前と同様の結果であった。降雨時についてはN-4.2 では評価図書時を上回った時があったが、過年度に生じた調査地点上流の自然崩落が要因と考えられるほか、着陸帯周辺においても土砂が流出した形跡がないことから、着陸帯の供用に伴う影響は見られず、定常状態にあると判断した。

植物では、貴重な植物種の移植後の生育状況については移植後の経過が生存率92%と非常に良好であること、今年度は地上部での確認回数が少ないトサカメオトランの結実が見られたこと、移植地周辺にはトサカメオトランの繁殖株が見ら

れることから、周辺地を含め定常状態にあると判断した。また、温湿度については林縁の一部で多少湿度の低下がみられるが、林内奥部では乾燥化等の大きな影響は確認されておらず、同様の傾向が継続していることから定常状態にあると判断した。影響範囲 50m 内における貴重な植物種については種類や地点数に多少の増減が見られたものの、いずれも自然的な変化によるものと考えられ着陸帯の存在・供用に伴う影響は確認されなかったことから定常状態にあると判断した。早期緑化帯については無障害物帯縁のマント群落・ソデ群落が形成されており、供用時も維持されているほか、無障害物帯でも一部、リュウキュウイノシシの掘り返しが見られたものの、植生の回復が進んでいることから、定常状態にあると判断した。N-4.1、N-4.2 の工事で副次的に発生した裸地については草地環境が復元しており、継続してみられることから定常状態にあると判断した。

動物では、周辺林内乾燥化については、評価図書時の調査と比較して増加しているほか、確認種に著しい違いが確認されていないことから、着陸帯の存在・供用に伴う影響は確認されず、周辺個体群の存続を脅かすことはないものと考えられる。訓練車両の走行に伴うロードキルについては、発生件数は少なく集中して発生する箇所も確認されていないことから、定常状態にあると判断した。ヘリコプター飛行時の騒音及び貴重な鳥類、カエル類の繁殖状況については、評価図書時よりも多くの鳥類、カエル類の繁殖状況が継続して確認されており、着陸帯の存在・供用に伴い鳥類・カエル類の存続を脅かしている状況はないと考えられることから、定常状態にあると判断した。

生態系では、ノグチゲラの人工採餌木についてはすべての採餌木で利用が確認されたほか、原型をとどめないほど腐朽が進み、新たな採餌痕が少なくなっている採餌木もあるなど、環境保全措置の効果は確認されたことから終了とする。コウモリ類の巣箱については現況調査では樹洞性のコウモリ類の確認はなく、巣箱設置後の利用も確認されていないことから、生息している可能性が低いものと考えられるが、穴の向きを変更することで利用が促される可能性がある。注目種については各種の生息・繁殖状況は着陸帯の存在・供用時においても継続して確認されており、供用に伴う影響が確認されていないことから、定常状態と判断した。

景観では工事前から裸地・路傍草地が広がっており、リュウキュウマツ景観区の一部が裸地・路傍草地に変化している。眺望地点における変化は、植生の生長及び沿道の下草刈りによる減少であり、着陸帯の存在・供用による変化は見られていないことから、定常状態と判断し終了とする。

表 9.4-1 終了する環境保全措置

調査項目		調査回数	調査地点	調査手法
動物	マンガースの捕獲調査	・1回	・G、H、N-1地区	各地区40個×15日間の捕獲調査、マンガースフェンスの代替措置として実施
その他	復旧後の監視	・4回	・N-4.1崩落地の復旧場所	N-4.1崩落地の復旧場所において、植生の回復状況等の変化を写真撮影により記録

表 9.4-2 終了する事後調査

調査項目		調査回数	調査地点	調査手法
赤土等	下流河川のSS濃度、濁度及び流量	・4回(平常時) ・連続(降雨時)	・N-4.1 ・N-4.2	平常時は直接採水、降雨時には自動採水器による採水を行い、SS濃度について室内分析
植物	貴重な植物種の移植後の生育状況	・4回	・N-4地区	移植株について生育状況を確認し記録
	林内の気温・湿度	・連続	・N-4.1 ・N-4.2	自動式記録計を用いて温湿度の連続観測
	影響範囲50mにおける貴重な植物種及び植生の生育・分布状況	・4回	・N-4.1 ・N-4.2	植物相調査及び植生調査を実施し、貴重な植物種及び植生の生育・分布状況の把握
	早期緑化帯における植栽種の生育・形成状況	・4回	・N-4.1 ・N-4.2	早期緑化帯における植栽箇所において調査方形枠を設置し、コードラート内において確認された植物種の生育・分布状況の把握
	工事による副次的影響を復元した箇所における植生状況	・4回	・N-4.1北西側及び西側土砂置き場 ・N-4.2北側、南側	工事による副次的影響を復元した箇所において、植生の回復状況について、写真撮影による記録
動物	工事用車両の走行に伴うロードキル	・3回	・工事用車両の走行ルート	目視によるロードキルの把握
	貴重な動物種の移動後の生息状況	・4回	・G、H、N-1地区、歩道、工事用道路、既存道路	目視による生息痕や巣穴の確認
	周辺林内の乾燥化による貴重な動物種の生息状況	・4回	・N-4地区	目撃法、任意採集法等による生息状況の確認
	訓練車両の走行に伴うロードキルの状況	・4回	・訓練車両の走行ルート	目視により路上における貴重な両生類、爬虫類等のロードキルの状況を把握
	ノネコ・マンガースの生息状況	・4回	・N-4地区	捕獲トラップの設置及び自動撮影装置による記録
	ヘリコプター飛行時の騒音及び貴重な鳥類カエル類の繁殖状況	・4回	・N-4地区	現地踏査により繁殖場所及び繁殖状況を記録。ヘリコプター騒音は、工事中にJIS Z 8731に基づき地上高1.2mにて測定。
生態系	ノグチゲラの人工採餌木の利用状況	・4回	・N-4地区	設置した人工採餌木を目視により、採餌跡等の利用状況を確認
	コウモリ類のねぐら利用としての巣箱の利用状況	・4回	・N-4地区	設置したコウモリボックスを目視(ファイバースコープ)により、利用状況を確認
	注目種の生息・繁殖状況	・4回	・N-4地区	目視等により注目種ごとの生息・繁殖状況の確認
景観	困繞景観	・4回	・歩道、工事用道路、既存道路の補修、整備に伴い移動を行った貴重種の移動先	眺望点からの撮影による眺めの状況変化の把握

9.5 事後調査の結果及び前述した「9.1」から「9.4」までに掲げる事項を踏まえた、 対象事業の実施に係る環境影響の総合的な評価

当該事業に伴う工事は、N-4.1(平成24年度完成)、N-4.2(平成26年度完成)、G、H、N-1(a)、N-1(b)(平成28年度完成)、G進入路(平成29年度7月完成)で行っており、平成29年4月から平成30年3月までの期間における調査の結果をみると、事業の実施に伴う環境への影響については、現時点では概ね評価図書や検討図書で想定した範囲であると評価した。

表 9.5-1 各調査項目における総合評価(工事中：G 進入路)

調査項目		評価結果
赤土等による水の濁り	濁水処理水のSS濃度及び流量	G進入路の工事に係る濁水処理水は透視度30cm、SS20mg/Lであり、評価図書に示すとおり、環境基準のA類型を満たすSS濃度(25mg/L)に適切に処理されているものと考えられ、環境保全措置は実施できたと評価された。
植物	貴重な植物種の移植後の生育状況	移植後の生存率は89.5%であり、地上部で確認できない株が一部であるものの、概ね良好な生育が確認されており、評価図書で示した地域個体群の存続も図られているものと評価された。
動物	貴重な動物種の移動及び移動後の生息状況	モニタリング対象種2種()、()については、移動後概ね移動数と同程度が確認されていることから、評価図書で示した個体の生存を確保するための環境保全措置が実施できたものと評価された。
	工事用車両の走行に伴うロードキルの状況	工事を実施したG進入路ではロードキルは確認されなかった。その他の区間におけるロードキルの発生は低頻度であり、低速走行の要請及び小動物への注意喚起など環境保全措置が実施できたものと評価された。

表 9.5-2 各項目における総合評価(存在・供用時：G、H、N-1、N-4 地区)

調査項目		評価結果
騒音	ヘリコプター騒音	平成29年4月～平成30年3月の時間帯等価騒音レベルは15.1～63.1dBの範囲で推移しており、評価図書の予測結果を上回る日は10日であった。
赤土等による水の濁り	下流河川のSS濃度、濁度及び流量	平成29年度の平常時における下流の沢でのSSは、N-1地区St.b及びG地区は3mg/L以下、H地区は2mg/L以下、N-1地区St.a、St.c、N-4地区は1mg/L未満であり、着陸帯の存在・供用に伴う影響は確認されなかった。 降雨時SSについては、H、N-4.2以外の地点については工事中よりも低い値となっており、工事中よりも高い値を示したH、N-4.2については、流下経路において自然崩落が確認されており、自然的な現象により上昇したものと考えられ、影響は殆どないものと評価された。
植物	貴重な植物種の移植後の生育状況	移植後の生存率は94.9%であり、生存株については、地上部で確認できない株が一部であるものの、概ね良好な生育が確認されており、評価図書で示した地域個体群の存続も図られているものと評価された。
	林内の気温・湿度	林縁の一部において多少湿度の低下が見られるが、林内奥部では乾燥化等の大きな影響は確認されておらず、評価図書で示した周辺林内への影響は低減されているものと評価された。
	影響範囲50mにおける貴重な植物種及び植生の生育・分布状況	影響範囲50mにおける貴重な植物種及び植生の生育・分布状況に極端な変化は確認されなかったことから、評価図書時の予測を上回る影響はないものと評価された。
	早期緑化帯における植栽種の生育・形成状況	平成29年度調査においては、マント群落・ソデ群落の形成が不十分であったことから、次年度以降も継続した経過観察を行い、環境保全措置の効果について把握する必要がある。
	工事による副次的影響を復元した箇所における植生状況	N-4.1西側及び北西側の土砂置場、N-4.2北側及び南側における復元箇所については、概ね植生が回復している。一方、既存道路北側、H付近、G直近の作業ヤードについては、植生が回復していないため、次年度以降も継続した経過観察を行い、植生の回復状況の把握する必要がある。

表 9.5-3 各項目における総合評価(存在・供用時：G、H、N-1、N-4 地区)

調査項目		評価結果
動物	貴重な動物種の移動及び移動後の生息状況	モニタリング対象種2種()、()については、移動後概ね移動数と同程度が確認されていることから、評価図書で示した個体の生存を確保するための環境保全措置が実施できたものと評価された。
	周辺林内の乾燥化による貴重な動物種の生息状況	評価図書との比較では各地区で確認種数が増加しており、乾燥化による著しい影響は確認されなかったほか、評価図書時の予測を上回る影響はないものと評価された。
	訓練車両の走行に伴うロードキルの状況	低頻度であるもののロードキルが発生しており、引き続き低速走行の要請及び小動物への注意喚起など環境保全措置を実施していく必要がある。
	ヘリコプター飛行時の騒音及び貴重な鳥類、カエル類の繁殖状況	N-4地区冬季の貴重な鳥類・カエル類の繁殖地における騒音状況は、等価騒音レベルの時間帯平均は春季(鳥類・カエル類繁殖地)47dB、冬季(カエル類繁殖地)74dBであった。評価図書で影響レベル70dBと比較して冬季は高い値を示していたが、貴重な鳥類、カエル類の繁殖状況は確認されていた。ただし、()については調査時期が遅れたため、確認状況が減少していた。G地区、H地区、N-1地区についても貴重な鳥類、カエル類の繁殖が確認されているが、供用時1年目であることから、今後も引き続き事後調査において生息・繁殖状況を把握する必要があると考える。
生態系	ノグチゲラの人工営巣木の利用状況	つつき跡等は確認されたものの営巣利用には至っておらず、引き続き事後調査を実施し、環境保全措置の効果について把握する必要がある。
	ノグチゲラの人工採餌木の利用状況	G地区、H地区、N-1地区については、ノグチゲラにより採餌に利用され始めており、今後の更なる利用が期待される。N-4地区では、設置後7年程度が経過した人工採餌木では、材の腐朽により新たな採餌利用は少なくなっており、設置後4年程度の人工採餌木は盛んに利用されているなど、環境保全措置が実施できたものと評価された。
	コウモリ類のねぐら利用として巣箱の利用状況	G地区、N-1地区では()による巣箱の利用がそれぞれ1例確認され、今後も環境保全措置の効果について把握していく。N-4地区についてはコウモリ類による巣箱の利用は確認されていなかったが、評価図書時においても確認されていなかった。
	注目種の生息・繁殖状況	注目種について評価図書と比較し生息状況や繁殖状況に大きな変化は確認されなかった。
景観	困繞景観	G、H、N-1地区では工事の実施に伴いイタジイ-リュウキュウチク景観区から裸地路傍草地景観区へと変化しており、眺めの状況は大きく変化していたことから、今後も継続調査を実施し、景観区及び眺めの状況を確認していく。 一方、N-4地区の着陸帯完成後については景観区の変化はなく、眺めの状況は安定していた。

第10章 事後調査を委託された者の名称、代表者の氏名及び主たる事務所の所在地
当該事後調査は以下に示す者に委託して実施した。

【平成 23 年 3 月 17 日～平成 30 年 3 月 31 日】

株式会社 沖縄環境保全研究所

代表取締役 平良辰二

〒904-2234 沖縄県うるま市字州崎 7-11

TEL (098)934-7020

FAX (098)934-7021

【平成 20 年 4 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日】

株式会社 ニュージェック 沖縄支店

支店長 寺尾敏男

〒900-0004 沖縄県那覇市銘苅 3-22-33

TEL (098)860-5715

FAX (098)860-5716

【平成 19 年 3 月 29 日～平成 22 年 3 月 31 日】

復建調査設計株式会社 福岡支社

支社長 福田直三

〒812-0011 福岡市博多区博多駅前 2-17-19

TEL (092)471-8324

FAX (092)415-3751